平成30年度　嬉野市教育委員会　教育基本目標評価シート

嬉野っ子ワクワクデザイン2018（学校教育）

具体的活動		教育委員会における自己評価				
		評価	項目	項目ごと実績･成果･評価	課題･問題点	改善点
具体的施策	(1)確かな学力の育成事業	A	・主体的・対話的で深い学びを取り入れた「嬉野メソッド」を確立し、その実践を図る。 ・「確かな学力育成部会」等により、学習状況調査等の各種調査の詳細な分析に基づく課題把握とその対策の充実を図る。 ・「新たな学習内容の推進部会」を中心に学習指導要領の改訂に応じた小学校外国語活動及び特別な教科道徳の指導方法等についての研究を行う。 ・新聞を取り入れた授業の工夫改善を行う。NIE実践校として五町田小が発表予定。 ・小学校において「嬉野市子ども学校塾」による学習習慣の定着を、中学校においては、「放課後等補充指導支援事業」により、学習規律や学びの習慣の定着を図り、基礎学力の向上を図る。	・前年度の吉田小中の研究を受けて、市内全学校で「嬉野メソッド」の取組が進んだ。 ・全国及び県学習状況調査の結果を詳細に分析し、市全体の傾向と各学校の状況について課題を明らかにし対策を検討した。 ・道徳の指導に関しては市内全職員研修会で教育センター等から講師を迎え研修を行った。小学校英語についてもスーパーティーチャー等を迎え授業研究会等を行った。 ・全小中学校で積極的に取り組んでいる。今年度五町田小が県のＮＩＥ実践校に認定され特に積極的に取り組んだ。 ・「子ども放課後塾」、「放課後等補充指導支援事業」ともに計画どおり実施することができた。両事業共に学力向上に寄与したと思われる。	・個々の教員の意識にまだ温度差があり、実践に至っていないケースも見られる。 ・多くの学校で学年によって（年によって）成績が上下する状況が見られる。低学年からの一貫した取組が大切である。 ・小学校での英語指導について教員の意識の差がまだ見られ、市費の推進員に頼りすぎるケースもある。 ・新聞を活用した指導の有効性は十分認識しているが、時間的な制約で深い学習活動につながらない状況もある。 ・「子ども学校塾」は5年目となり保護者等にも定着してきて事業が軌道に乗ってきたが、学校によっては児童の学習の様子が真剣でない等の指摘も受けたこともあった。	・ＵＤの視点からもその必要性や有効性を全職員に訴えていくようにする。 ・状況調査を受ける学年だけでなく、全職員で問題や結果を分析して自分の担当する児童生徒に必要な指導を施すよう依頼していく。 ・2020年からの全面実施に向け小学校教員の力量を高めるため研修会等を続けていく。 ・五町田小での取組など新聞を活用した有効な指導方法を他校にも波及させていく。 ・指導員任せではなく、学校でも児童に対し真剣に学習に取り組むよう指導を行う。
	(2)豊かな心の教育推進事業	A	・嬉野市副読本「生きる力」の教科書（改訂版）を活用し、「生き生きタイム」の特設授業を実施することにより、生きる力の育成を推進する。 ・「生きる力」の教科書を使用した小学校での授業研究会を開く。 ・総合的な学習の時間において、「嬉野学」の学習を展開することを通して、嬉野市を愛する心を育て、家庭地域との連携を図った心の教育を推進し、「さがを誇りに思う」児童生徒の育成を図る。 ・今年度開館した嬉野茶交流館「チャオシル」の見学、体験活動を進める。 ・市内小中学校の実践事例やワークシート等をまとめた「嬉野学指導資料集」を活用した実践をもとにテーマの深化や指導の改善・充実を図る。	・本事業も各学校で取組が定着してきた。 ・今年度は吉田小学校において生きる力の教科書活用研修会を開催した。 ・「嬉野学」について各学校で地域人材等を活用した教育活動が展開された。全国学習状況調査のアンケートでは地域との交流の割合は全国や県に比べ高い傾向にある。 ・今年度は新しくオープンしたうれしの茶交流館「チャオシル」を活用した市内全体の教育計画を「豊かな心推進部会」で策定した。 ・「嬉野学指導資料集」に沿って実践された各学校作成の教材やワークシート等をデジタル化して市内学校で共有し、教員の負担軽減と指導内容の充実を図った。	・項目によっては社会の変化に合わせて内容を修正する必要がある。 ・各学校の地域学習の取組に特に課題は見られない。 ・嬉野市の名産品である「お茶」の学習の取組が求められる。（特に塩田町内の学校） ・チャオシルの活用を今後進めていくが、各学校の状況に応じた効果的な活用方法を研究する必要がある。特に体験活動を行う場合には体験料が必要になるため、補助金の活用などの取組が必要になる。	・次年度は改訂の年度となっており、平成32年度からの使用に向けた改訂を行う予定である。 ・うれしの茶振興課や農林課等とも連携して、チャオシルを効果的に利用した教育活動を推進させていく。そうすることで塩田町内の児童生徒もお茶が自分の住む地域の名産品であるという意識が育つと考える。
	(3)たくましい心身の育成事業	B	・全国調査に基づいた体力向上のための目標を各学校で設定し実践を図る。 ・栄養教諭（学校栄養職員）との連携による食育の充実を図る。 ・SSW、教育相談員、適応指導教室支援員等と学校の連携により不登校児童生徒の未然防止や学校復帰に向けた取組を強化する。	・全国調査の結果を踏まえた取組を各学校に依頼したが、時間的な制約もあり、そこに焦点を当てた指導が十分にできたとは言えない。 ・栄養教諭等を中心にした食育の指導は意欲的に行い、児童生徒に「食」の重要性の理解を深めることができてた。 ・学校と関係者が連携した活動ができており不登校の未然防止については中学校で効果も見られるが、小学校での増加が見られる。	・児童生徒の健康保持のために、学力向上の取組と同様に体力向上にも力を注ぐ必要がある。 ・栄養教諭の配置が市内に3名（嬉野2名・塩田1名）と少ないため、指導の回数が多くは取れない。 ・不登校は今後増加する要素も多く継続的な取組が必要である。	・児童生徒の体力や運動能力についての理解を深め、課題や改善点を焦点化することにまず取り組む。 ・栄養教諭を招聘した食育の授業の際は事前の準備に力を入れ教育効果を高めていく。 ・不登校傾向の有無に関わらず一人一人の児童生徒の様子を丁寧にみて、気になる子へは早め早めの対応をチームで行っていく。
	(4)特別支援教育の推進事業	A	・ユニバーサルデザインを踏まえた教育環境を作り、インクルーシブ教育を推進する。 ・子育て支援課との連携により早期からの教育相談や就学相談を行うことにより、本人・保護者に十分な情報を提供するとともに、関係機関との連携、幼稚園・保育園と学校との連携を密にし、児童生徒の適切で滑らかな就学や進学を目指す。 ・国の「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業」により、嬉野小中学校の教職員を中心に、発達障害と思われる児童生徒への支援の在り方についての知識や技能を深める。 ・スーパーティーチャーの活用など通級による指導の充実を図る。	・教育のユニバーサルデザイン化に向けて、教室環境や授業づくりを統一し、児童生徒にとって分かりやすいものにしようという取組が広がってきた。 ・早期支援コーディネーターを中心にして、子育て支援課、健康づくり課等と連携を図り、就学支援に係る取組を進めることができた。また、必要に応じて関係外部機関との連携も行った。夏季休業中には、教育相談員と小学校職員が保育園等を訪問し、配慮を要する子どもに対する支援の実際を学ぶことができた。 ・「発達障害に関する教職員等の理解啓発・専門性向上事業」の取組により特別支援教育に関する研修会が充実した。また、学校経営スーパーバイザーを配置したことで、教職員の特別支援教育に対する理解が深まった。 ・スーパーティーチャー（五町田小職員）については、年間３回の就学相談業務や他校の通級担当者への研修で活用した。	・学校によって対象となる児童生徒の有無もあり、教育のユニバーサルデザイン化に対する職員の意識に差が見られる。 ・この事業が本年度で終了となるため、来年度以降も学校で実践できるような体制づくりが望まれる。 ・通級による指導を受ける児童生徒も増加しており、スーパーティーチャーの持つ経験やスキルを各学校に紹介する場を計画的に設けることが必要である。	・市の特別支援教育部会で、すべての学校で実践できるよう共通理解を図っていく。 ・早期支援コーディネーターは子育て支援課で予算措置を行っていることから、継続配置に向けて財政部局に強く働きかけていく。 ・事業の指定校であった嬉野小、嬉野中での取組を、市内のすべての学校に波及させていく。 ・特別新教育部会等での活用を図りたい。
	(5)校長先生の知恵袋事業	A	・学力向上や体験活動の充実に向けた校長のマネジメントを支援し、特色ある学校教育の推進を図る。 ・創意工夫を生かした学習や生徒の興味、関心に基づく学習や体験活動を通して、学力向上や豊かな心の育成を図る。 ・校長の創意による学校の特色づくりを目指す事業に対する支援を行う。	・各学校に配当された予算により、「English Words サロン」の開設、佐世保米軍基地ガールスカウトとの交流、フラワー大作戦、農業体験等、特色ある体験活動が行われている。 ・校長の未来に向けた学校づくりへの思いを具現化する事業として、特色を鮮明に打ち出した取組（プレゼン）に対してより多い予算が配分された。 ・講師招聘による授業研究会等による学力向上や草花の栽培、維新博覧会体験による心の教育の充実もなされている。	・各学校の校長先生からの要望額は多額であるが、予算拡充は困難な状況である。 ・プレゼンテーションの内容と実際の支出項目に若干違いがある学校があった。	・本事業の成果を示して、今後も財政部局に予算増を要求していく。 ・予算振り分けの決定にプレゼンの良し悪しだけでなく、計画案の内容を精査し加味していく。
	(6)ろく･さんプラン推進事業	A	・小中の教師による研究授業への相互参加や、中学校教師が小学校に出向いて授業を行うなど、ろく・さんプラン（スリーステップ）を実践し、９年間を見通した指導方法の改善や学力の定着を図る。 ・小学校６年生卒業後の学習課題の工夫や、その学習課題に基づく中学校入学後の歓迎テスト等により学習のつまづきの解消に努め、中１ギャップ対策を充実させる。 ・新たに策定した「小中連携スリーステップ」に沿って各中学校区で教育活動を実践する。 ・９年間を通した学習習慣定着のためのリーフレット等の活用による小中連携した取組を行う。	・各中学校区ごとにスリーステップの年間計画に基づき小中連携のブロック研修会を実施し、共通実践が行われた。複数の小学校のある嬉中校区や塩中校区でもノーテレビデーや家庭学習など小中で共通の取組を行った。 ・小６年生の春休みの課題は市内で統一し中学校に提出する形が定着してきた。また、小学６年生の中学校での体験学習や学校説明により、中１ギャップによる不登校生徒は見られない。 ・3年計画の1年目としてスリーステップに沿った実践がなされた。 ・確かな学力育成部会が作成した家庭向けのリーフレットを児童生徒の全戸に配布し啓発を図った。しかし、やはり学習習慣の定着には児童生徒の個人差が見られる。	・小中連携についての骨格は出来上がってきたと思われる。今後は嬉野メソッドの効果的な実践などより深化した小中連携を進めていくことが求められる。 ・学習指導要領が改定される機会に改めて小中の指導内容をお互いに研究し、その系統性を確認することも重要と考える。 ・家庭学習の時間は、学習状況調査のアンケートでは国や県に比べて少ないという結果が見られた。家庭や地域と連携した取組が求められる。	・ろくさんプラン部会と確かな学力育成部会の協働体制をつくり、嬉野メソッドの効果的な実践を進めていく。 ・新たな学習内容の推進部会の取り組むテーマの一つとして小中の学習内容の系統性について研究に取り組む。 ・学校運営協議会や地域コミュニティ等とも連携して地域全体での児童生徒の学力向上を訴える。そのため地域コミュニティ等を連携した学力向上フォーラムを開催する。

評価委員からの指摘事項･意見	評価結果（　段階）
①　(3)の「たくましい心身の育成事業」については、取り組みが若干拡散している印象がある。学校等への周知を効果的にする意味からも、目的をはっきりさせるなどの焦点化･重点化を図ることが望ましい。 ②　あわせて(3)の「たくましい心身の育成事業」については、睡眠をはじめとする生活リズムの重要性について着目し、家庭向けの啓発を含めた重点化を期待したい。 ③　(1)の「確かな学力の育成事業」に関連して、「嬉野市子ども学校塾」事業は、児童の学習習慣定着に大きな役割を果たしているため、確実な継続を期待したい。 ④　(4)の「特別支援教育の推進事業」に関連して、「発達障害に関する教職員等の理解啓発･専門性向上事業」は、学校･教員の専門性向上について効果が挙がっていると考えられ、市民からの評価も高い。今後の事業定着を期待したい。 ⑤　また(4)については、早期支援コーディネーターを活用した、就学前からの早期支援･接続の支援が進められる中で、児童の要配慮情報がしっかり学校間で伝達されるなど、教育･保育の質を高める成果が上がっており、高く評価できる。継続と定着を期待したい。	A

指摘を受けての改善点
①②　(3)「たくましい心身の育成事業」について、児童生徒の身体的かつ精神的な健康保持をめざし、体力の　向上、食育の充実そして規則正しい生活習慣の推進に力を入れていく。そのために次のような取組を行いたい。 　１体力の向上…小学校において県教育委員会が実施しているスクールチャレンジへの参加や年間を通したマラソンタイムの実施を勧める。 　２食育の充実…栄養教諭を活用した食に関する指導を授業参観などの時に行い、保護者を巻き込んだ食育の推進を図る。 　３規則正しい生活習慣の推進…市の教育相談部会（又は豊かな心の推進部会）を中心に実態調査や児童生徒及び保護者や地域に向けた啓発活動を実施する。 ③「嬉野市子ども学校塾」事業は、低学年においてわが子の宿題を学校塾に任せてしまい家庭学習に無関心になってしまう保護者もあるという課題もあったため、次年度は4年生から6年生を対象に実施し、これまで目的としていた「学習習慣の定着」をふまえながら、さらに一段高めた「学力向上」を目的とする事業としたい。 ④「発達障害に関する教職員等の理解啓発･専門性向上事業」は文科省の委託が終了するため事業そのものは終了する。しかしこれまでの2年間で嬉野小･中の教職員は特別支援教育について研修を深めており、次年度以降その成果を他校に広めてほしいと考えている。市の特別支援部会を中心に研修会を開くなどの手立てをとっていきたい。

評価４段階		
	A	達成（80%以上）
	B	ほぼ達成（51～79%）
	C	やや不十分(50～21%)
	D	不十分(20%以下)